

テクルが表す機能についての考察

鈴木 基伸 (名古屋大学大学院)

要旨

本稿では、テクルが表す起動用法を取り上げ、テクルが表す機能についての考察を行った。従来の研究では、テクルが起動相を表すという理由について、また、特定の動詞を要求するという現象についての説明がなされてこなかったが、それらの問題を解明することを目的とした。本稿では、テクルが事態の過程性に焦点を当てていることから、過程性に着目してテクルの機能についての考察を行った。その結果、テクルが焦点を当てるのは事態の中にある過程性であり、その過程性の存在がアスペクト形式としてのテクルを成立させていることがわかった。そして、その過程の一部を取り出すことが、テクルのアスペクト形式としての機能であることを説明した。また同時に、テクルに内在する「来る」の視点的意味から、「出現の過程を表す動詞」や「知覚動詞」などの、発話者の視点の存在が大きく関係するような動詞とは親和性が高く、それらの動詞と共に起して、過程的解釈を付与することがわかった。それによって、テクルが必ずしも部分相というアスペクト内容を表さないことも説明できた。

1. はじめに

補助動詞テクルは「動詞のテ形+来る」という形態的特徴を持っているため、その一義的な意味は、前項動詞の意味を伴った動作主の、話者への空間的な移動行為、もしくは働きかけ¹であると言えるが、前項動詞にそのような行為者の意志を伴った移動の意味が含まれない場合、派生的に時間的進展を表す²。先行研究³でも述べられているように、そのような場合は起動相や継続相のアスペクトの意味が表される。本稿では、テクルのアスペクト用法の中の起動相を表す用法（以下、起動用法）に焦点をあて、その機能について考察を行う。

テクルは起動相というアスペクト内容⁴を表すが、同様に起動相を表す語彙的アスペクト形式シハジメルと比較すると、その振る舞いが異なる。シハジメルは、事態の「はじまり」に焦点を当てて、そこを部分的に切り取ることがその機能であるため、漸次的進展性を表す「だんだん」や、事態の終局的な時点を取り出す「かなり」などの副詞と共に起し難いが、テクルにそのような副詞と共に起させることは容易である。((1)(2)参照)。また、「見える」「聞こえる」などの「感覚を表す動詞」において、起動相を表すというよりは、全体相を表していると考えられる例がある。((3)(4)参照)。

(1) 文法が{??だんだん/??かなり}わかりはじめた。

¹ 「太郎が走ってきた」「花子がボールを投げてきた」など

² これを益岡(1997:188)は、「空間的方向性から時間的方向性へ」の「意味の拡張」であるとしている。

³ 吉川(1973)、寺村(1984)、森山(1987)、有田(2001)など

⁴ アスペクト形式によって表されるアスペクトの意味のことをさす。従来、このアスペクト内容のことを完了相・未完了相などと称してきたが、アスペクトが事態を全体と部分に分けるものであるということとを考慮すると、町田(1993)が用いた「全体相」「部分相」という用語の方が適切であると思われるため、本稿でも、町田(1993)に従って、アスペクト内容について言及する際に、「全体相・部分相」という用語を用いる。起動相は、事態全体の中の開始部分をフォーカスしているため、部分相の一種であると言える。

- (2) 文法が{だんだん／かなり}わかってきた。
- (3) 僕たち兄弟の初恋の人が待っている屋敷の、白い扉が{見えてきた／見えた／??見え始めた}。
(重松清『リビング』)
- (4) プレットがトリーのことを考えていたとき、彼を呼ぶトリーの声が{聞こえてきた／聞こえた／??聞こえ始めた}。「プレット!どこなの?」
(平江まゆみ『スウィート・ベイビーズ』)

テクルの機能が起動相の標示に限定されるのであれば、これらの現象は生じないはずであり、起動相以外のアスペクト内容を表しているとしなければ説明できない。

そこで本稿では、アスペクト形式としてのテクルが、どのような条件で成立するのかを動詞の意味や事態の性質から観察し、その結果、どのようなアスペクト内容を表すのかを観察する。そして、それらの考察から、テクルが表しているのは何か、つまりテクルが表している機能とは何かということ明らかにすることを目的とする。また最後に、本稿の考察によって得られたテクルの機能から、なぜ起動相というアスペクト内容が導かれるのかについて言及する。

2. 先行研究における問題点

吉川(1973)は、「氷が溶けてくる」「雨がぱらついてくる」のようなモノの移動を含意しないテクルの用法を「アスペクトを表すもの」(吉川(1973:200))とし、アスペクト形式の一つであると認め、テクルのアスペクト的意味とそれを導く動詞の特徴について以下のように分類した。

表1. 動詞の意味とアスペクト的意味

用いられる動詞	表される意味
出現の過程を表す動詞(あらわれる、うまれる、うかぶ、こみあげる、よみがえる、わく、など)	出現の過程
変化動詞(なつく、ふえる、へる、おもくなる、かなしくなる、たてこむ、きたなくなる、ながくなる、はげしくなる、ひくくなる、など)	変化の過程
出現の意味もなく、変化動詞でもないもの(ぱらつく、ふる、など)	過程のはじまり
感覚を表す動詞や可能を表す動詞(きこえる、あしおとがする、よかんがする、みえる、わかる、おもえる、おもわれる、など)	状態のはじまり

この吉川(1973)の分析は、以後のテクル研究の基盤となるものであり、高橋(1969)、寺村(1984)、森山(1987)、今仁(1990)、益岡・田窪(1992)、有田(2001)などに受け継がれているものである。森田(1968)、近藤(1985)、益岡(1997)などは、明確にアスペクトであると言及してはいないが、空間的移動を表すテクルと分け、「時間的」なものとして分類しているため、他の研究者と極端に意見を異にするものではない。従って本稿では、この吉川(1973)の研究を参考にテクルの考察を行うが、これまでの先行研究においてテクルが論じられる場合、テクルだけでなく、テイクも含めた考察であった。また、アスペクトとしてのテクル・テイク

だけではなく、空間的移動用法のテクル・テイクをも含めたものであり、テクル・テイクの全体像を捉えることが多く語られてきた。そのため、テクルのアスペクト用法、しかも起動用法のみに焦点を当てた研究は不十分であったと言え、テクルの起動用法がなぜ特定の動詞を要求するのか、具体的にどのようなアスペクト意味を表すのかという点についての説明は未だ明らかにされていないと言える。また、テクルの機能を語る際に、その視点的意味から、「具体的叙述を表す」(吉川(1973:219))や、「心理的に話し手のほうに近づく」寺村(1984:158)といった、やや抽象的な表現が用いられてきた。これらは何れも日本語母語話者による直観からなされる説明であり、論理的説明とは言えない。従って、テクルのアスペクト的機能の分析が十全であるとはいえず、その機能を用例からの考察によって明らかにする必要があると言えよう。

3. テクルが事態に要求する性質について

テクルは起動相を表すとされるが、漸次的進展性(以下、過程性)を表すような「だんだん(と)、徐々に、次第に」といった副詞(以下、過程性副詞)と共起することが多く⁵、テクルはこれらの副詞との親和性が非常に高い。

- (5) そして、青ざめていた顔が日一日と赤みをまし、痩せていた体も、だんだん太ってきました。
(江戸川乱歩『化人幻戯』)
- (6) 特別養護老人ホームでの入所受け入れが徐々に可能となってきた。
(土居洋子『慢性疾患患者の看護』)
- (7) それを見ているうちに、風野は次第に腹が立てきた。(渡辺淳一『愛のごとく』)

また、これらの副詞がなくとも、テクルが表す意味の中には、「だんだん、徐々に」という意味が感じ取られる。(5-7)から過程性副詞を除いたとしても、「急に」「突然」という意味で解釈されることはないと言える。従って、テクルが原義的に持つ意味特性として、漸次的進展性、つまり過程性というものが挙げられると言えよう。そうであるとすれば、テクルは、過程性副詞と同様に事態における過程性に焦点を当てるわけであるが、テクルと過程性副詞ではその成立要件が異なる。

仁田(2002:242f)は、過程性副詞が出現する事態を「持続性を持った変化」および、「変化ではないものの、事態の存続・展開によって、事態の実現度に漸次的拡大の生じるもの」であるとしている。これらは両者とも漸次的進展性(本稿での過程性)を含むものであるため、過程性副詞は、対象となる事態に過程性を要求することがわかる。事実、過程性を含まないような事態、例えば瞬間的に事態が成立するものなどに、過程性副詞を共起させることはできない。

- (8) 太郎が{*だんだん/*徐々に}死んだ。
- (9) 花子が{*だんだん/*徐々に}ぎっくり腰になった。

「死ぬ」や「ぎっくり腰になる」という事態は、瞬間的に成立するものであるため、その事態

⁵ 仁田(2002)によると、これらの副詞は〈漸次的進展型〉の副詞と分類され、変化や進展的な事態において出現する。

の中に、過程性という性質を見出すことはできない。部分相を表すテイルを共起させてもその事態の時間的内部を切り取れないことからそれがわかる⁶。従って、過程性副詞の使用条件として、事態に過程性が備わっていることが挙げられる。しかし、テクルにおいては必ずしもそうであるとは言えない。テクルが過程性副詞と親和性が高く、原義的に過程性という意味特性を持っているのであれば、テクルによって表される事態に過程性を要求してもおかしくはないが、過程性の存在を認めることができないような事態にも、テクルを共起させることはできる。テクルがアスペクト形式として機能する際に用いられる動詞として、吉川(1973:218ff)は、「出現の過程を表す動詞」「変化動詞」「出現の意味もなく、変化動詞でもないもの」「感覚を表す動詞や可能を表す動詞」を挙げたが、「変化動詞」を除いた三種の動詞は、過程性副詞を共起させにくいといえる。以下の例を参照されたい。

[出現の過程を表す動詞]

- (10) 夜もぐっすり眠れ、肩も凝らない。なによりも自身が生まれてきた。
 (奥田英朗『空中ブランコ』)
- (11) その子たちはセリーナの子であって、ゲイブの子ではないのだと思うと、なぜか悲しみに似た感情がわいてきた。
 (新井ひろみ『プリンセスにお手上げ』)

[出現の意味もなく、変化動詞でもないもの]

- (12) 今日何度目かのやわらかい小雨が降ってきた。
 (野田知佑『世界の川を旅する』)
- (13) 雨がぱらついてきたので、石室にはいつて休む。
 (吉川(1973:221))

[感覚を表す動詞や可能を表す動詞]

- (14) 八重はまた襖を開めたが、病人は目覚めたらしく、弱々しい声がきこえてきた。
 (乙川優三郎『墓の端々』)
- (15) 私は設問に示された図を眺めているうちに、その複雑な仕組みの装置が、奇怪な拷問の道具のように思えてきた。
 (三田誠広『パパは塾長さん』)

これらはいずれも、テクルによって示されているため、事態の過程性にフォーカスが当てられていると考えるが、(10-15)における事態を、テクルを用いず「過程性副詞+タ形式」によって表そうとすると、適格性が下がると言える。

- (16) ??なによりも自信がだんだん生まれた。
 (17) ??なぜか悲しみに似た感情がだんだんわいた。
 (18) ??やわらかい小雨がだんだん降った。
 (19) ??雨がだんだんぱらついたので、
 (20) ??弱々しい声がだんだん聞こえた。
 (21) ??奇怪な拷問の道具のようにだんだん思えた。

⁶ 「太郎が死んでいる」「花子がぎっくり腰になっている」はいずれも結果継続の意味となる。

従って、「自信が生まれる」「感情がわく」「小雨が降る」「雨がぱらつく」「声が聞こえる」「拷問の道具のように思える」といった事態には、「変化動詞」に見られるような明確な過程性は存在しないと言える⁷。つまり、テクルは過程性副詞とは異なり、対象となる事態に必ずしも過程性を求めないことがわかる。しかし、先にあげたような瞬間的に事態が成立してしまうもの、つまり明らかに過程性がないような事態に対してテクルを用いることが出来ないこともまた確かである。

(22) *太郎が死んできた。

(23) *花子がぎっくり腰になってきた。

このように、過程性が明確に認められないものにもテクルを用いることは可能であるが、過程性を認めにくい事態の中で、テクルの共起を可能にする要素は何なのであろうか。本稿では、その要素とは本動詞「来る」と動詞との間における意味的關係性にあると考える。

吉川（1973:218）は、テクルと「出現の過程を表す動詞」との関係について、またテクルと対になって語られるテイクと「消滅の過程を表す動詞」との関係について以下のように述べている。

(24) 動詞が出現の過程を示すものであれば「てくる」が、消めつの過程を示すものであれば「ていく」が使われている文の方が自然な日本語という感じがする。また、補助動詞のない文が、一般的叙述をあらわしているのに対して、補助動詞のある文は、具体的叙述を表す傾向がある。このように、「てくる」は出現の過程を表す動詞につけて用いられ、その過程に具体的叙述性を与える。「ていく」は消めつの過程を表す動詞につけられて用いられ、その過程に具体的叙述性を与える。そういった表現が多く行われた結果、「てくる」「ていく」をつけた方が自然な日本語という印象を与えるに至る。

吉川（1973）がこのように述べたのは、テクルの中にある本動詞「来る」の意味と「出現」の意味とが、テイクの中にある本動詞「行く」の意味と「消めつ」の意味とが、意味論的に密接な繋がりを持っているからだと考えられる。「来る」と「出現」との関係について有田（2001:7）は次のように述べている。

(25) 出現という事態は、基準時点以前には存在しなかった状態が基準時点以降に存在すると捉えなおすことができる。それはちょうど、移動という事態を状況論的に捉えた場合と近似する。移動先すなわち移動体の着点を基準にすると、移動事態の発生により、基準点に存在しなかったものが基準点に存在するようになる。出現の用法も同様に考えることができ、「非存在→存在」の局面がテクルによって焦点化されるのである。

⁷ 過程性副詞が共起しにくいからといって、過程性が無いことの証明にはならないかもしれないが、「変化動詞」と比較して、それが劣ることに違いないと言える。また、テクルが対象としているのは、動詞の意味だけではなく、名詞句の性質や数なども含めた出来事であるため、過程性を判断する上ではもっと詳細な考察が必要となるが、本稿では立ち入らない。

つまり、テクルの中の動詞「来る」が持つ「発話者のもとへの移動」の意味が出現の意味に転じて、テクルに「出現」を表す用法が生じるということであり、テクルと「出現」との間には意味的な親和性があると言える。これと逆のことがテイクにおいても言えるわけであるが、これらのテクルと「出現」、テイクと「消めつ」における親和性が、吉川（1973）の言う「具体的叙述」や、「自然な日本語という印象」という記述へとつながっていったと思われる。吉川（1973）や有田（2001）の記述を肯定的に捉えたとすれば、テクルと「出現を表す動詞」とのつながりは、過程性という要素よりは、意味的なところにあると考えられる。そして、意味的關係によって「出現を表す動詞」とテクルとの共起が許されるのであれば、「感覚を表す動詞や可能を表す動詞」や「出現の意味もなく、変化動詞でもないもの」とテクルとの共起関係も説明できると思われる。

「感覚を表す動詞や可能を表す動詞」や「出現の意味もなく、変化動詞でもないもの」には、「出現」という特性を認めることはできないが、出来事に対する認識の獲得（知覚）という点では「来る」と結びついていると言える。本動詞「来る」は言うまでもなく、発話者の視点をその意味の中に含めた視点動詞である。従って、発話者のみが捕らえる事態に対する認識の獲得を表すことができる。「来る」が表す移動の意味や、そこから派生する出現・発生の意味は常に発話者の視点を伴うものであるため、発話者の視点を置く事ができない、つまり発話者が直接経験した事態ではないものには用いられにくい。以下の例を参照されたい。

(26) 【名古屋に住んでいる発話者が、昨日名古屋で起きた地震のことを言及して】

- a. 昨日、地震が起きてびっくりしたよ。
- b. 昨日、地震が来てびっくりしたよ。

(27) 【名古屋に住んでいる発話者が、昨日中国で起きた地震のことを言及して】

- a. 昨日、中国に地震が起きたね。
- b. ??昨日、中国に地震が来たね。

(26b) のように、発話者が直接的に知覚可能であると判断可能な場合において「来る」は容認されるが、(27b) のように発話者が直接的に知覚できないと判断される場所における出来事の発生は「来る」で表すことができない⁸。従って「来る」が表す「発生」とは、発話者の知覚に基づいた事態の発生を表していることになり、「来る」によって発話者の事態に対する認識の獲得を標示することができると言えるが、その機能をテクルにも認めるのであれば、「感覚を表す動詞」については、テクルとの間に密接なつながりを見出すことができる。「感覚を表す動詞」とは発話者自身が感じたことを表すものであるため、そこに発話者の視点は必ず存在すると言える。この種の動詞を一人称以外で用いることが困難なことからもそれがわかる⁹。また、吉川（1973）が「可能を表す動詞」として挙げた「わかる」なども発話者自身が感じるものであり、視点を認めることが出来るという点では「感覚を表す動詞」と同質のものと言える

⁸ たとえ知覚しなくとも発話者の関係のある場所であれば可能である。例えば発話時点においてアメリカに住んでいたとしても実家の名古屋で地震が起こったことを知れば、「昨日名古屋に地震が来たみたい。」と「来る」を用いることができる。従って発話者の認知領域が深く関係する問題であるが、これ以上の考察は本稿の趣旨と外れるため、言及はとどめておく。

⁹ 小説などにおける、筆者によって描かれる登場人物の感情描写などは例外とする。

¹⁰。

また、「出現の意味もなく、変化動詞でもないもの」として挙げられている「ばらつく、ふる」であるが、これも事態に対する認識の獲得と関わっていると言える。これらの動詞にテクルを用いることが出来るのは、発話者が直接事態を知覚した場合であり、(27b)の例と同様視点を想定できないような場合に用いることが出来ない¹¹。

(28) [名古屋にいる発話者がテレビのニュースなどで情報を得て]

- a. ??東京で雨が降ってきた。
- b. ??北海道で雪がばらついてきた。

つまり、「ばらつく、ふる」というのは「知覚動詞」と同様、発話者の事態に対する認識の獲得と大きく関係していると言える。

以上のことを考慮すると、テクルがアスペクト形式として機能するために対象となる事態に要求する性質は、明確な「過程性」を持った動詞、及び、本動詞「来る」と結びつきの強い「出現」の意味を持った動詞や「知覚動詞」のように事態に対する認識の獲得を通して使用されるような動詞によって表される事態であるということがわかる。そして、それらの性質をテクルがフォーカスすることによって、アスペクト的意味が生じるのだと考えられる。アスペクト形式としてのテクルが成立するための手続きを以下のように示すことができる。

表1. テクルのアスペクト内容の形成過程

「過程性」を持つ事態	→	「過程性」へのフォーカス	→	アスペクト内容
「出現」を表す事態	→	「出現」へのフォーカス	→	
「知覚」を表す事態	→	「認識の獲得」へのフォーカス	→	

4. テクルが表すアスペクト内容

前節では、テクルが事態に要求する性質について言及したが、ではそれぞれの事態とテクルが共起した場合、どのようなアスペクト内容が表されるのであろうか。変化動詞と共起して、その過程性に焦点が当てられた場合、ル/タ形式で表される全体相に先行する部分相を表している。それは、「事態の成立・完成の度合いが百パーセントであること」(仁田(2002:199))を表す「完全に、完璧に」や、「動きが実現した結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の、主体や対象の状態のありようについて言及した」(仁田(2002:49))、「丸々と、かちんかちんに、からからに、びしょびしょに、こなごなに」などの結果の副詞と共起しにくいことからわかる。以下の例は、非テクル形のものである。

(29) 手足からは完全に力が{抜けて/??抜けてきて}、だらりと床に垂れている。

(宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』)

(30) 口の中がからからに{渴いて/??渴いてきて}、ときどき唾を呑みこまなくてはならない。

¹⁰ 以下、「感覚を表す動詞や可能を表す動詞」をまとめて、「知覚動詞」と称する。

¹¹ 伝聞形式である「ようだ」「らしい」を用いれば容認される。

(村上春樹『海辺のカフカ』)

- (31) 王様はかちんかちんに{固まった／??固まってきた}喉からやっとの思いで声を絞りだした。
(桑原一世『最後の王様』)

従って、テクルが表している過程というのは全体相に先行する一過程であると言える。過程の始まりから終わりまでを全体相としたらその中の一過程とは部分相であると言えるため、ル／タ形式とテクルでは全体相と部分相というアスペクト対立が成り立っていると言える。

では、テクルが具体的に過程におけるどの部分を表しているのだろうか。先行研究においては起動相というアスペクト内容を表すとされているが、必ずしも事態のし始めを表しているとは認められないものも少なくない。(32) (33) は、テクルが用いられている例である。

- (32) しかしその頃になって、わたしは何かふと淋しくなる瞬間が{出来てきた／出来始めた}。
(三橋一夫『鬼の末裔』)

- (33) それとも関連しているが、麻薬の問題も広がりつつある。これまでよりも手帳に安く手に入るルートが{出来てきた／??出来始めた}こともあって、麻薬に手を出す青少年が増えている。
(河合隼雄『「出会い」の不思議』)

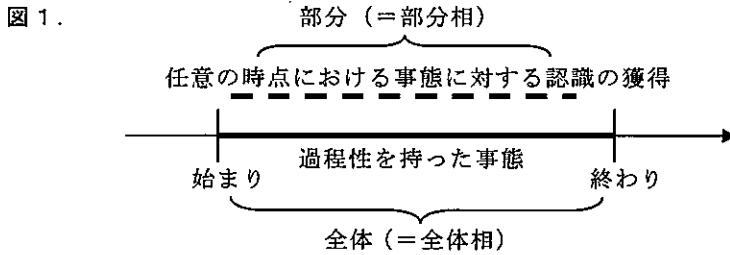
(32) における「出来てきた」は、「淋しくなる瞬間を感じるようになった」という意味であり、シハジメタと置き換えても文法性に問題は生じないことから、開始相を表していると解釈できる。一方、(33) における「出来てきた」は「麻薬を手に入れるルートがほぼ出来つつある」という意味になり、事態のし始めというよりは「だいぶ、かなり」といった副詞によって表されるような、極限性と結びついているように感じられる。ゆえに、(33) をシハジメルと置き換えると、適格性が劣るようになる。従って、テクルが起動相を表しているといっても、シハジメルのように常に開始の部分を表しているわけではなく、事態の性質によって切り取る過程の部分が異なると言える。これは、テクルに「かなり」「すっかり」といった極限性と結びつく副詞が共起しうることからわかる。

- (34) 右手は、おハシ、カロリー表、電卓と忙しく行き来し、食事はかなり繁雑な様相を呈してきた。
(東海林さだお『なんてったって「ショージ君」』)
- (35) でも、そうしたチーム事情もすっかり変わってきたため、シドニー大会の翌年からは、再びシャペロンを置くことにしました。
(上野浩治『アテネの空に日の丸を！』)

これらの極限性と結びつく副詞と共起可能であるということは、テクルが表す過程の一部というのは、開始部分だけに限られず、事態の終局的な部分をも含まれるということである。そうであるとすれば、テクルは過程性という性質が保持されれば、開始部分に限らず任意の時区間を切り取ることができると言えよう。そのように考えれば、テクルが表すアスペクト内容が起動相だけに限られないことが説明できる。

では、この任意の時区間を切り取ることができるとテクルの性質をどのように説明できるだろうか。それは、前節で言及した、形態的要素である本動詞「来る」がもつ事態に対する認識の獲得を標示する機能から説明できると思われる。テクルが「出現」や「感情を表す動詞」と

結びつきうるのは、テクルの中の「来る」が持つ発話者の視点に由来するものである。その視点的意味がテクルの機能の根底に流れるのであれば、過程性の標示においても出来事に対する認識の獲得ということと結びつけることが出来ると思われる。つまり、テクルが表す過程の中の任意の時区間とは、発話者がその一過程に対して認識を獲得した時区間と一致するということである。これを図示すると以下のようになる。



従って、過程性を認めることができる（変化動詞によって表されるような）事態に対しては、終了限界を含まない過程的部分を切り取ることが、テクルのAspect形式としての機能であると言える。

このように、過程性に対する認識の獲得の標示ということが、テクルのAspect的機能として認めることができたわけだが、吉川（1973）が挙げた、「変化動詞」以外の種類の動詞に関しては、その解釈をやや変える必要がある。「変化動詞」以外の3種の動詞というのは、テクルの中の「来る」と意味的に密接なつながりがあるものであった。従って、テクルによって表されるAspect内容も「変化動詞」の場合とは変わってくる。例えば、「見える」「聞こえる」などの「知覚動詞」がテクルと共に表されるAspect内容が、全体相形式と比較して明確なAspectの対立を持っているとは思われないような場合もある。以下の例はテクルが原文で用いられているものである。

(36) 僕たち兄弟の初恋の人が待っている屋敷の、白い壁が{見えてきた／見えた}。

((3) 再掲)

(37) ブレットがトリーのことを考えていたとき、彼を呼ぶトリーの声が{聞こえてきた／聞こえた}。「ブレット！どこなのか？」

((4) 再掲)

(36) (37) において、テクルを全体相形式であるタ形式と置き換えても表されるAspect内容は変わらないと言える。(36)は「白い壁が見える」という事態に対してテクルが用いられているわけだが、テクルがその事態の成立の一部を表しているとは考えにくい。「富士山が見えてきた」などと言う場合は、富士山の全体像が見えることが全体相であるのに対して、富士山の一部が見えることが部分相と想定できるため、「富士山が見えてきた」におけるテクルが部分相を表していると考えられることができるが、(36)の場合、「白い壁」という対象物が既に全体の中の一部であるわけであるから、「白い壁」の一部が見えたと解釈するよりは、「白い壁」の全体が見えたと解釈する方が自然である。また、(37)は、「聞こえてきた」内容が「ブレット！どこなのか？」という非常に短い発話であるため、発話の内容を認識したうえで「聞こえてきた」と発話したと考えられる。従って、この例においても、テクルが全体に対立する部

分的アスペクトを表しているとは考えにくい。

このように、テクルの中の「来る」と視点的意味の上で関連性がある「知覚動詞」に関しては、テクルによって必ずしも部分相が表されないことがわかる。しかし、すでに例に挙げたように、「富士山が見えてきた」などの場合は、「徐々に、次第に」という過程性副詞を共起させても問題ないことから、部分相というアスペクト内容を表していると考えられることも事実である。従って、テクルが「知覚動詞」と共起した場合、対象に対する知覚が終了してしまう以前における部分的な事態の成立と、知覚を獲得してしまった後の、つまり事態が成立した結果を表す場合があると考えられる。これらをアスペクト内容として考えると、前者は部分相を、後者は全体相に相当すると考えられる。これはつまり、感覚を表すということを考えたときに、ぼんやり感じていたものが次第にはっきり感じるようになるという段階的な進展性、つまり過程性をその動詞の意味の中に見出すことは難しいことではない。そのような場合、感覚の獲得の中に過程性という要素を見出すことができる。テクルは過程性に対して焦点を与えることが可能なわけであるから、感覚の獲得の中に過程性という要素が含まれている場合、そこにフォーカスが当てられ、全体相に対立する部分相が表されるのだと考えられる。また、全体相を表す場合であるが、これはテクルと「知覚動詞」との関係から説明できる。すでに述べたように、「知覚動詞」とテクルは、発話者の視点を内在するという点で深く結びついている。従って、テクルと共起することによってより明確に視点の存在を表すことができ、吉川（1973）が述べた「具体的叙述」用法として成立するのだと思われる。この場合、テクルとル/タ形式は、具体的叙述と一般的叙述という意味的な対立が成立するため、アスペクト的意味は全体相を保ったままでも成立しうると考えられる。

では、このテクルの機能としての具体的叙述性の付与とはどのような機能だと言えるであろうか。本稿では、それを過程性の付与であると考え、(36)に挙げたように、「白壁が見える」といった事態は、全体に対立する部分を想定しにくいため、「見えてきた」によって表しているのは「見えた」という全体相に先行する部分相であるとは考えにくく、両形式共にアスペクト的に全体相を表していると考えられる。しかし「見えてきた」によって示される内容とは、「白壁が見える地点」に到達するまでの過程をも含めて表されているように感じられる。(36)同様、「見えてくる」が用いられている例を参照されたい。

(38) 中央本線を踏み切りで過ぎ、しばらく行くと急坂が{見えてくる/見える}。

(西津貴美子『甲州道中を行く』)

(39) 普通は、白壁の小さな家並みが広がる緩やかな道を丘の上の方へ、上の方へ向かって行くとその丘の上に十基の風車が突如{見えてくる/?見える}というのだが、

(松村恭子、松村敏弘『ビバエスパーニャ』)

(38)で示されているのは、「急坂が見える」という事態のみを表しているわけではなく、急坂が見える前の過程をも含めた「見えない」状態から「見える」状態までの過程を取り出しているように思われる。これが、非テクル形で示されると、「見える」という状態を提示しているだけで、その前の過程をも含めているとは解釈しにくい。もちろん、「しばらく行くと」という前件が提示されている以上、そこに至る過程はすでに示されていると言えるが、テクルを用いた方が、見えない状態から見えるようになる状態への変化までをも取り出していると言え

よう。また、(39)では、「十基の風車が」というように具体的に「見える」内容が示されているため、十基の風車の一部が見えるというよりは、十基の風車の全体像を捉えるところまでを表わしていると考えられる。しかし、「突如」という起動への時間量が僅少であることを表す副詞¹²が共起しているため、「見える」という非テクル形では適格性が劣ってしまう。なぜならば、「突如見える」とすれば、「十基の風車」が全く見えない状態から急に全体像を見渡せる状態へ変化したことを意味することになるが、おそらく巨大な建造物である「十基の風車」が突然目の前に現れることは想定しにくい。動作主が移動して行った結果、漸次的にその全体像を捉えるようになると思う方がより自然であるといえる。テクルが事態に過程性を付与すると考えれば、見えない状態から徐々に見える状態になるまでの過程を表すことができるため、「突如」という副詞を用いても、それが「十基の風車」の一部が見え始めるまでの時間量であると解釈できるため、容認することができるといえる。従って、テクルが表す「具体的叙述」とは、変化に至るまでの過程をも含めて描写するという、過程性の付与と考えることができる。この過程性の付与とは、言わば過程的解釈の付与ということであり、過程の一部を切り取るという部分相標示の機能とは反対の性質のものであると言える。

このようなテクルのアスペクト内容の2種類の解釈は、「出現の過程を表す動詞」においても同様に成立する。「現れる」「生まれる」などを例に取ると、出現の一過程を表している場合と、過程的解釈を与えている場合がある。

(40) また、南アジアでも一九九〇年代以降、栄養不足人口が増えており、さらに移行経済国での栄養不足人口も現れてきた。(西川潤『世界経済入門』)

(41) さて、こうした時期に龍馬も長次郎も海舟の前に現れてきたのである。(吉村淑甫『近藤長次郎』)

(40)におけるテクルは、「栄養不足人口の現れ」が段階的に増加している一過程を示しているが、(41)は、龍馬と長次郎が海舟の前に現れたことを、現れる前からの過程をも含めて表している。この「出現の過程を表す動詞」も、「感覚を表す動詞や可能を表す動詞」と同様の2つの意味を表すが、これは、両者の動詞が発話者の事態に対する認識の獲得に基づくものであると言う点でつながっているからだと考えられる。

最後に、「ぱらつく、ふる」などの「出現の意味もなく、変化動詞でもないもの」であるが、これらにテクルが用いられた際は、「出現の過程を表す動詞」や「知覚動詞」とは異なり、全体相が表されることはない。これは、「～分、～時間」などの継続時間を表す数量詞と共起しにくいことからそれが分かる。それらの数量詞がともなった場合、事態の継続時間が示されるために、開始から終了までの事態全体が提示されることとなる。従って、そのような場合、全体相で表されるのが通常であり、部分相形式で示されることはない。

(42) 小雨が5分ほど{ぱらついた／??ぱらついてきた}。

(43) 雪が1時間ほど{降った／??降ってきた}。

¹² 仁田 (2002 : 247) 参照

従って、「ばらついてきた」「降ってきた」という場合、それらはいくまで「ばらつく」「降る」という事態が始まったという意味になり、発話した時点においても依然としてその動作が継続している必要がある。このように、「ばらつく」「降る」といった動詞とテクルが共起した場合、テクルが表すアスペクト内容とは部分相に限定されると言えるが、これは、「ばらつく」「降る」という動詞がテクルによって表されるのは、事態に対する認識の獲得に基づくものであるという点から説明できると思われる。表1で示したように、これらの動詞によって表される事態の中で、テクルによって焦点を当てられるのは、事態に対する認識を獲得した時点であると言える。「ばらつく」「ふる」であれば主体は雨や雪に限定されるが、それらに対する認識を獲得する時点というのは「ばらつき始め」「降り始め」の時点であることが一般的であろう。従って、テクルが焦点を当てるのはあくまで「はじまり」に限定され、ル/タ形式が担うような全体相までも表すことはないのである。

テクルによって表されるアスペクト内容を動詞の種類別にまとめると以下のようになる。

表2. 動詞の種類とアスペクト内容

動詞の種類	アスペクト内容
変化動詞 (増える, 減る, ~なる, など)	過程の一部 (部分相)
出現の過程を表す動詞 (現れる, 生まれる, 浮かぶ, など)	過程の一部 (部分相) 過程性の付与 (全体相)
知覚動詞 (見える, 聞こえる, わかる, など)	過程の一部 (部分相) 過程性の付与 (全体相)
出現の意味もなく, 変化動詞でもないもの (ばらつく, 降る, など)	過程のはじまり (部分相)

5. テクルが表す機能について

これまで、テクルがアスペクト形式として機能する場合に対象となる事態に対して要求する性質や、表されるアスペクト内容について考察してきたが、そこから導かれたことは、テクルのアスペクト的解釈は、2つの要素によって成立しているということであった。一つは、事態における過程性へのフォーカスであり、もう一つは、テクルが内在的に持つ本動詞「来る」が持つ視点性と事態の性質との関わりから生じる、発話者の事態に対する認識の獲得へのフォーカスであった。これらの考察を斟酌して、テクルが表す機能とは次のように示すことができる。

(44) テクルが表す機能

- ① 過程性を持った事態が成立する時区間の中で、一過程を認識した時点を部分的に表すことができる。
- ② 「出現」や「知覚」などの、発話者の視点と密接に関わる事態に過程的解釈を与える。

テクルの機能をこのように示すことで、テクルがなぜ部分相と全体相という異なるアスペクト内容を表すことができるのかを説明できる。また、テクルが起動相を表すとされる理由につ

いても説明が可能である。これは、テクルの機能①から導かれるものであるが、テクルによって示される過程の一部とは、発話者が事態を認識した時点である。過程性を伴った事態の中の一過程を、認識の獲得をした時点において取り出すということは、それ以前に発話者はその過程的な事態に対して認識を得ることが出来なかった、つまり気づかなかつたと言える。つまり、認識を獲得した時点というのは、同時に、発話者にとっての事態に対する最初の「気づき」であると言える。過程の中の最初の気づきということは、発話者にとっての過程の始まりであると言い換えることが出来よう。なぜならば、認識の獲得以前においては、発話者にとってその事態は始まっていないと捉えられ、気がついた時点で発話者にとってその過程が始まったと解釈されるからである。ここで言う認識の獲得とは、テクルが持つ「来る」の機能から派生される機能であるが、この認識の獲得の標示という機能が、テクルが表す起動相というアスペクト内容へとつながって行くと思われる。

6. おわりに

以上、アスペクト形式としてのテクルの機能について考察してきたわけだが、本稿では、テクルが表す過程性に焦点を当てて従来の研究では考察されてこなかったテクルの機能について明らかにできたと思う。本稿で得られた結論とは、テクルの機能は、過程性の一部を切り取り、部分相というアスペクト内容を表すと同時に、たとえ過程性が無くても発話者の事態認識と深く関わるような事態であれば過程的な解釈を付与することができるというものである。

過程性を切り取るという機能を認めれば、過程性が存在すれば任意の時区間を取り出すことができると考えられるため、テクルのアスペクト的解釈が起動相のみにとどまらないことを説明でき、「だんだん」「かなり」のような事態の漸次的進展性、極限性を表す副詞と共起しうることも説明できる。また、テクルが事態に対する認識の獲得を標示しやすいことから「出現の過程を表す動詞」や「知覚動詞」などの動詞との親和性が高いことを認めれば、それらの動詞と伴って「具体的叙述」を表すことも説明できる。「具体的叙述」については、過程性の付与という解釈によって説明することができる。

これらの考察によって、テクルの機能についてこれまで以上に深く分析できたと思う。そしてその機能を明らかにすることによって、テクルの解釈をより明確に説明できると考える。本稿では、考察の対象を起動用法に限って行ったが、テクルが表すアスペクト内容は、「これまで～してきた」という継続を表す用法も存在するため、これについても考察を行う必要がある。また、テクルと対になって考えられるテイクについても考察する必要がある。以下の例を参照されたい。

(45) 寒くなって{くると/??いくと}, 村では冬の生活の準備が始まります。

(『みんなの日本語中級 I 本冊』)

(46) 年齢を重ねて{いくと/??くると}, 肌のしわが増えます。

このような、テクルとテイクの代替性の問題について、依然として十分な説明ができていない。従って、継続用法も含めたアスペクト内容、また、テイクも含めたアスペクト内容と両者の選択要因などについても考察を行う必要があるが、それらは今後の課題としたい。

参考文献

- 有田節子 (2001) 「日本語移動構文『V・テクル』についての覚書」『大阪樟蔭女子大学論集』38 pp.1-9
- 今仁生美 (1990) 「VテクルとVテイクについて」『日本語学』9-5, pp.54-66 明治書院
- 岡田幸彦 (2001) 「空間移動を表す動詞の分析—構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて—」
『日本語科学』10, pp.7-33
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 日本言語学会 (金田一春彦 (編) (1950)に再録 pp.5-26)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 近藤泰弘 (1985) 「補助動詞『てゆく』『てくる』の用法」『日本女子大学紀要 文学部』34, pp.25-34
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 浜田真理子 (1989) 「『行く／来る』と『～ていく／～てくる』の意味の繋がり」『Sophia linguistica』27, pp.45-56
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- (1993) 「時の分類」『言語』22-10 大修館 pp.58-65
- 森田良行 (1968) 「『行く・来る』の用法」『国語学』75, pp.75-87
- 森山卓郎 (1987) 「方向・移動の形式をめぐって」『語文』49, pp.29-40, 大阪大学国語国文学会
- (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 山本裕子 (2000) 「『くる』の多義構造—『くる』と『～てくる』の意味のつながり—」『日本語教育』105号, pp.11-20
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞アスペクトの研究」金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』pp.157-327, むぎ書房

使用コーパス

KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」, <http://www.kokken.go.jp/kotonoha/>, 独立行政法人
国立国語研究所